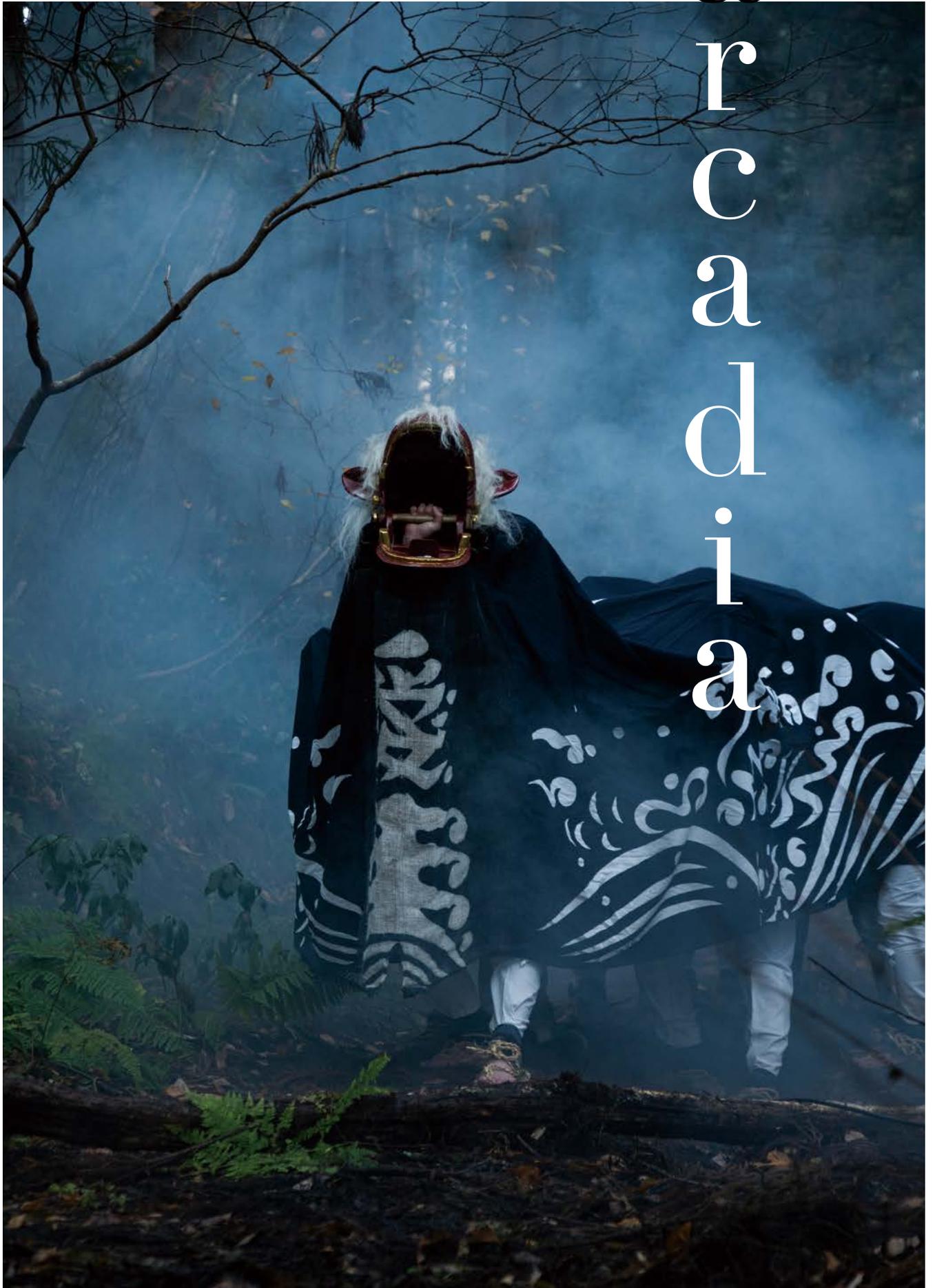
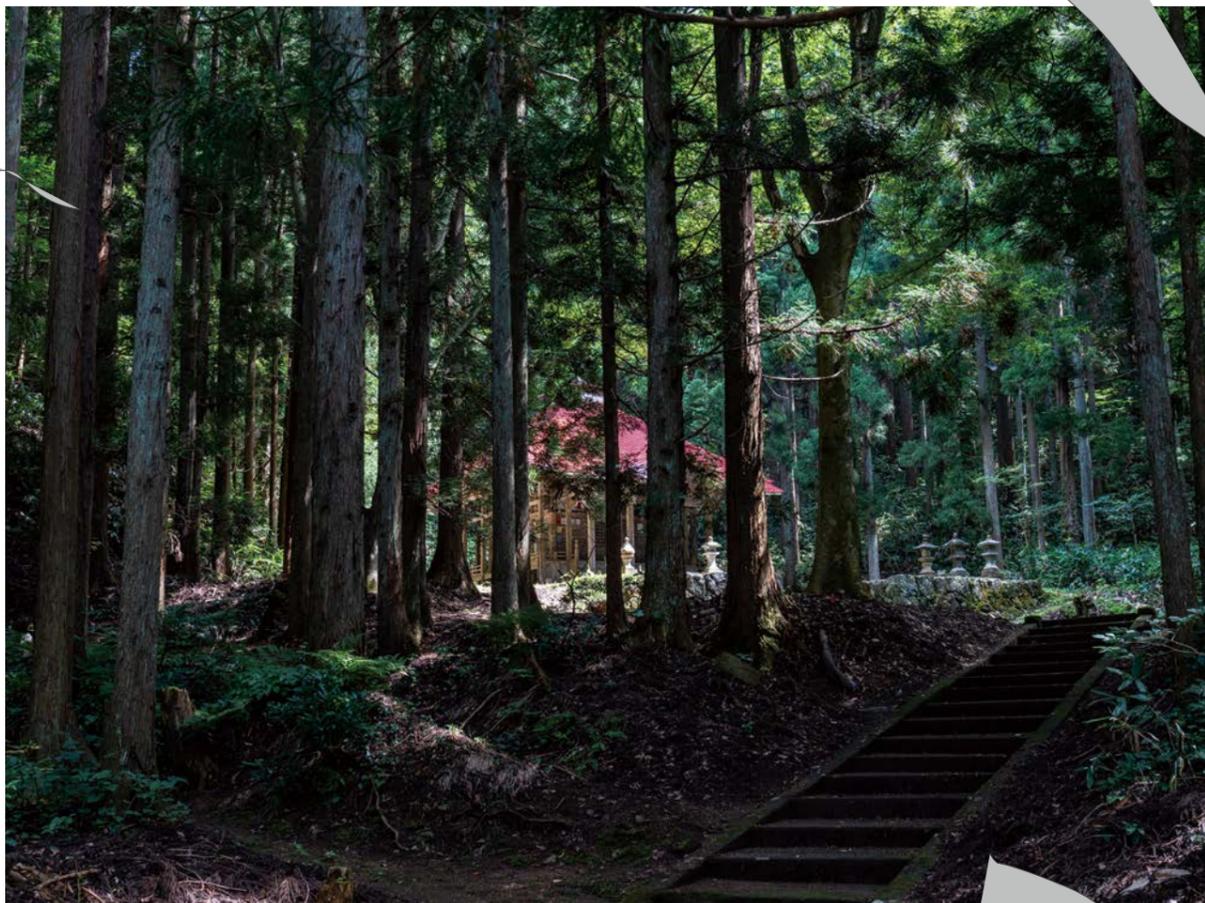


a
r
c
a
d
i
a



草岡津島神社例大祭での黒獅子舞（撮影日：2019年8月16日）



置賜三十三観音 第31 番札所 五十川観音

観音様

置賜三十三観音

と

水神様

黒獅子

盆地を吹き抜ける風が、冷たく肌を撫でる季節になりました。この季節になると置賜は鮮やかな色で満たされ始めます。この地で活躍した武将直江兼統は『天上人間一樣秋』と漢詩で秋を表現しました。

澄んだ蒼の秋晴れの空の下には、一面に敷き詰められた絨毯のように、風にそよぐ金色の稲。山に分け入ると、赤黄橙の色づく木々の葉。そして眼下にはカフェオレボウルに注がれたミルクのようにゆらめく雲海の白。まさに、世界も人も、一面の秋。

中世の時代に、この地に住んでいた人たちも、同じ風景を眺めながら秋の訪れを感じていたのかしらん、と物思いに耽ってしまう秋の夜長です。

季刊誌「arcadia」編集部

CONTENTS

04 黒獅子

置賜にもたらされ土着し独自の進化を遂げた獅子舞

12 置賜三十三観音

地域の人々によって守り紡がれる、信仰と交流の場

16 新しい視点から世界を見せる、まれびとを呼ぶ

やまがたアルカディア観光局

18 2市3町

フォトスポットマップ

フアインダー越しに見る東洋のアルカディア

Cover STORY

“他者と分かち合いたい”という人間本来の願いが偶然の重なりを生み出し、辿りついたその場所に文化があるのだとしたら、文化は“今ここ”にしかなく、また、手触り感のある願いと共に明日も形を変えていく。

今ここから見た歴史に必然があり、今ここには文化があり、明日には偶然がある。

黒獅子



置賜に流入した
人と文化は
土着して交じり合い
信仰の風土を
紡いで花開く

「置賜」という地域名が歴史に登場するのは、持統天皇が統治していた時代の『日本書紀』における「優曇曇郡」という言葉である。自然の恵みを受け取りながら素朴な暮らしをしていた縄文時代は去り、「日本」という国が成立する歴史の中で、置賜にも域外から様々なものがもたらされた。白鷹町にある鮎貝八幡宮の松山義彦宮司は、宮の縁起として中世東北で起きた出来事について語ってくれた。確かな記録は残っていないが、前九年の役で東北へと赴いていた源義家が、信仰していた戦の神様、応神天皇を祭る宮として建てられたという。もと中央にいた貴族や武士が、中央の移民政策により移住してきた時代である。当時、何かの縁で置賜に辿り着いた人々の足跡は、今でもこの地に息づいている。

「この鮎貝という地には、藤原北家の流れを汲む貴族の方が京都から移り住んできました。鮎貝」という地名を苗字にし、この地を治めることになるのですが、戦国時

代に入ると様相が変わってきます」と語る松山宮司。各地に点在する有力者たちが「戦国大名」と呼ばれるようになる時代になると、実力によって土地を治めるものが現れ始め、置賜地方には伊達家の武名が轟くようになった。地域を治めていた鮎貝氏は、5代目と6代目の当主が親子で意見が分かれたことをきっかけに家が分裂してしまふ。伊達家に仕えた者、争いに敗れ最上家を頼った者。それぞれの道を歩むようになった歴史がある。

領地を巡って激しい争いが幾度となく繰り返され、力を持つ者が持たざる者を打ち倒していくような時代。しかし、この時代がわたしたちに伝えるものは戦いの歴史だけではない。その一つが、今でも置賜地域の各所で伝承される文化「獅子舞」である。鮎貝八幡宮例大祭では、古くから「七進五退三転」という定形の足運びからその名称がつけられた「七五三獅子舞」が舞われている。



左：3代にわたって宮を守り継ぎ、白鷹の歴史を伝えていく船山宮司

右：江戸時代には近隣18ヶ村の総鎮守と定められていた鮎貝八幡宮

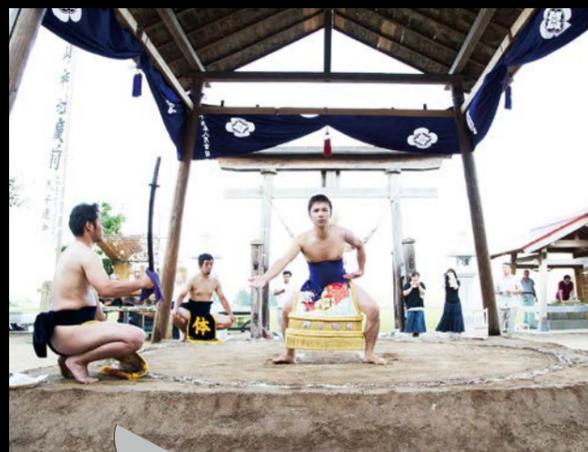
「獅子舞は元々、山で修行をする修験者たちが生業としていたお祓いの儀式を原型としているのでしょ」そう語るのは、獅子頭の彫り師で舞手でもあった渋谷正斗氏だ。獅子舞の舞い方には土地を清める意味合いが見てとれるという。そのルーツは反問と呼ばれる中国の道教で行われる歩行呪術の一種だ。大陸から流入した文化である反問は、獅子舞だけでなく、相撲の四股や歌舞伎の六方など、あらゆる文化芸能の「歩み方」の根底に流れる伏流水のようなものである。

長井市にある總宮神社の獅子頭は黒を基調とする外見で、「おしつさま」と親しみを込めて呼ばれている。黒い獅子頭は、修験者たちが権現様に通じる黒色を特別視していたことに由来すると考えられている。限られた一部の人たちのものだった舞いが、時代の流れの中で地域の人々に伝えられ、誰もが心待ちにする祭りになった。当時の様子に思いを馳せながら、ざろりとこちらを覗き込む獅子の姿をじっくり観察してみると、そのルーツが明らかになってくる。

どことなく平べったく面長で龍のような姿をしている總宮神社の獅子は「お水神様」とも呼ばれる。「水」は自然の恵みであ

りながら、時に豪雨で生命を脅かすものである。それゆえ中世の人々は、水や水をもたらす山を畏れ、信仰の対象とした。地域の水神信仰と外からもたらされた獅子舞が結びついた結果、「お水神様」と呼ばれる漆黒の獅子舞が紡がれたのではないかと。一方、獅子舞が草相撲と融合し、獅子を御する警固役が「角力」と呼ばれ若い男たちにとって憧れの存在となっていた地域もある。土着した獅子舞は、人々の信じていたものによって、千変万化、独自の進化を遂げているのだ。

「こうやって突き詰めていくと、オリジナリティというか、らしさが出て来たらうって感じが出てくるよね」と、渋谷氏はおもしろそうに笑った。「東洋のアルカディア」と呼ばれたこの地域の「らしさ」とは何か。脈々と紡がれている伝統文化や神事はその最たるものとして挙げられることが多いが、その実は外部からもたらされたものであり、土地流に改造されてきた中世の歴史が垣間見える。当時の人たちに習うなら、「らしさ」は再発見するものでも探そうとするものでもなく、「いまここ」にある生活から自然と滲み出るものなのかもしれない。



上：ながい黒獅子まつりで警固との勇ましい力比べを見せる、白山皇大神社の獅子

左下：鮎貝八幡宮の境内にある土俵。相撲は五穀豊穡を占う神事でもあった

右下：長井市の草間津嶋神社では今でも相撲で警固役を決めている

左：渋谷氏制作の獅子頭。先人の技術に学び調査研究を進めている

右：工芸舎獅子宿を営み、獅子舞の調査研究を進めている渋谷氏

INFORMATION

鮎貝八幡宮

〒992-0771 山形県西置賜郡白鷹町鮎貝3303-1
TEL: 0238-85-5510

社格等：旧県社 別表神社

御祭神：応神天皇 倉稻魂命

山形県指定文化財（本殿）、白鷹町指定無形文化財（七五三獅子舞）

工芸舎 獅子宿

〒993-0021 山形県長井市上伊佐沢2900
TEL: 0238-84-1143

受付時間 11:00～14:00（獅子宿 燻亭）

<http://shishiyado.club>





先人たちはこの場所で何を考えたのか。いずれ先人になる私が咄嗟に思いつくのは早朝山頂で飲む珈琲が美味しいということぐらいか。

置賜

信仰の場
交流の場

三十三観音



第16番札所 鮎貝観音。巡礼者の納札や写経がいくつも貼られている

置賜地域一円に点在する観音堂が、置賜三十三観音としてまとめられたのは江戸時代初期の頃。米沢藩の家老として活躍した直江兼統の正室・お船の方が西国三十三所巡礼を模したとも伝えられている。「当時、西国まで赴くのは海外旅行のようなもの。庶民が気軽にお参りできるものではありませんでした。だからこそ、住んでいる場所の近くで観音様にお参りできるようにとの願いが込められているのではないのでしょうか」。置賜三十三観音札所会の事務局を務める宝珠寺の関谷住職は、当時の信仰に思いを馳せながら語る。

観音堂の多くは集落に近い小高い場所に鎮座している。赤地に白抜き文字で記さ

れた「南無観世音菩薩」の幟旗を目印に観音堂へと歩みを進めていくと、杉林に囲まれた静けさが迎えてくれる。観音堂の周囲には、集落の有力者による揮毫や、明治・大正年間に集落の人たちで共にお堂を修復した際の寄進帖などが掲示されていて、地域の人たちによって守られてきた足跡が感じられる。

置賜の三十三観音は地域の人たちが守ってきたお堂が多く、高峯観音、時庭観音宮の観音、鮎貝観音のように、札所の名前は全て地名に由来している。今でも、寺ではなく地域の人たちによって管理されているお堂があり、第11番札所萩生観音では、地域の方が植えたであろう可愛らしいプラントーの花壇が参拝者を迎えていた。札所を巡ってみると、その多様性に驚かされる地域が輩出した実業家の碑が建てられているお堂もあれば、「湯殿山」と刻まれた山塔、種々の庚申講石碑、お地藏さまや、山中にあるであろう祠の分祠。さながら信仰のテーマパークのように、地域で信仰されていたであろうものがズラリと並んでいる境内に、土俵が残る場所もあれば、今では公民館の敷地になっている場所もある。観音堂は信仰の場であると同時に、交流の場でもあった。

集い、祈り、歓びを
分かち合う観音信仰
地域の人々によって
守り継がれる
信仰と交流の拠点



左：置賜三十三観音第21番札所
小野川観音 宝珠寺の関谷住職

右：観音講でのご詠歌唱和の一場面が描かれている小野川観音の絵馬

小野川観音のお堂には、大正・明治年間の観音講の様子を描かれた絵馬が残っている。詠歌唱和の稽古に励む人々の姿のほとんどは女性である。「当時の女性たちにとって、観音巡りは楽しみの一つだったのでしょう。中世、女性はなかなか家から外に出ることができなかった。ご詠歌は同世代のお友達と一緒に歌う楽しさを味わえ、観音巡りは家を離れて旅行する気分だったのでは」。日常を離れ、仲間とともに観音様へ祈りを捧げる旅をしていた女性たちの賑やかさに思いを馳せると、杉林に囲まれた素朴な聖域が、女性にとって日常を解き放つ特別な場所のようにも感じてくる。

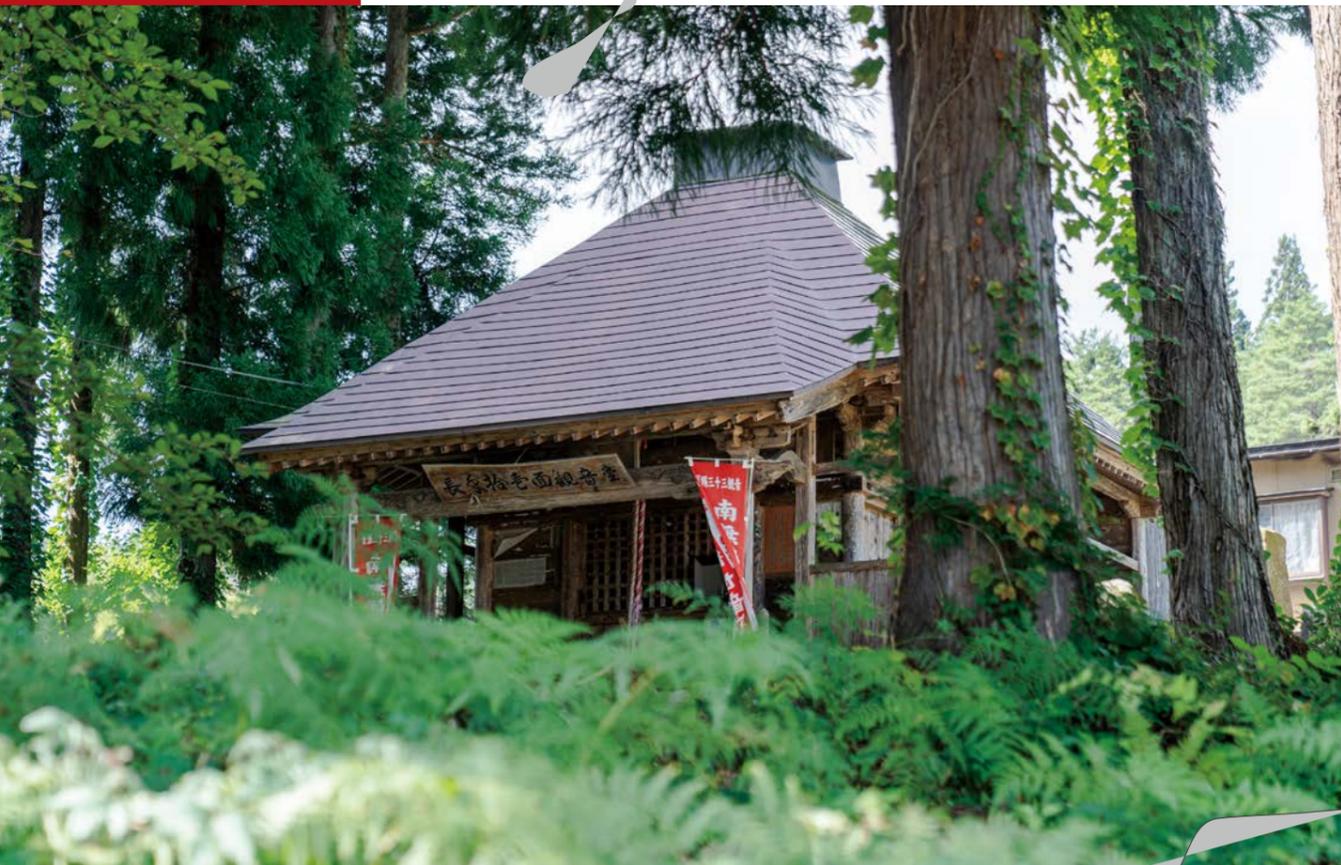
平安時代に始まった観音信仰は、この置賜地方にも伝播した。そこから長らく、祈りの場・交流の中心地として機能してきた観音堂も、時代の流れとともに試練に立たされている。コミュニティや地域の姿が変わり、地域の人たちで観音堂を活かすことが難しくなっているのだ。維持管理の難さから場所を移し、明治期に廃仏毀釈のありを受けて規模を縮小した観音堂もある。そんな中、改めて地域の中心としての観音堂を盛り立てていこうとする動きもある。

飯豊町中地区の中村観音を代々守り継いできた長岡英雄氏は、地域の女性たちを中

心に観音堂を守りご詠歌をあげる会を結成した。「観音様のもとで、女性たちが元気に活動している姿、文化を次世代につないでいきたい」と語る。ホトケヤマの中腹にある観音堂は、これまで何度も災害に遭いながら再建されてきた地域の人々の拠り所である。8月の豪雨によりお堂は損壊してしまったが、女性たちはご詠歌の稽古を続け、お堂の再建まで、訪れた人が少しでも楽しめるように秋桜の種を植えよう、と笑顔で話し合っていた。

たとえ、お堂の場所や外観が変われど、人々が集い、平穏を祈り、ともに歓びを分かち合おうとした置賜の観音堂に宿った精神性は、今でも受け継がれている。縄文時代から弥生、飛鳥、奈良、平安と時代が進むにつれて、置賜にも政争や闘争の足音が聞こえるようになってきた。そんな不安定な時代においても、自分たちで日々の豊かさを生み出そうとした、かつての置賜人たちの創意工夫を感じながら、観音様へと手を合わせたい。

なにごともおもふころは まるかれと
ひかしもいまも ここはにあやま



上：山の斜面から現在の場所に移築されたという第11番札所 秋生観音

下：第6番札所 時庭観音のご本尊は木造の聖観世音菩薩



創業から130有余年の老舗仏具店、株式会社武蔵屋は置賜三十三観音の奉賛店として、ご詠歌本や御朱印帳、観音様とのご縁を表す五色の糸で編まれた腕輪などを取り揃えている。15年ほど前から置賜三十三観音巡礼の推進に取り組んでいる柘植純子氏は、置賜地域の人たちの手で信仰を盛り上げようと、観音様と共に歩むことを意味する笈摺の縫製を飯豊町中津川地区の方に依頼し、自身も勉強をして巡礼のアテンドを務めている。

「33ヶ所を巡っていると、自分が手を合わせたときにほっとする観音様が必ずいらっしゃいます。私は25番の赤芝観音様が大好きなんです」。観音様の大慈大悲の御心はいつも人のそばにあり、ぜひその姿を見て感じてほしい、と語った。

感謝の心を伝える
株式会社 武蔵屋

株式会社 武蔵屋

〒999-2221 山形県南陽市柗塚1675-1
TEL：0238-43-2502 受付時間 9:00～18:00
<http://www.e-musashiya.com>



上：観音講の女性たちが、楽しそうな直会の様子が生き生きと描かれた絵馬

左下：置賜三十三観音、各札所の観音様のお姿が描かれたご詠歌の経本

右下：観音様を参拝したしるしとなる御朱印は、巡礼の楽しみの一つにもなる

INFORMATION

置賜三十三観音巡礼

山形県では最上、庄内、そして置賜三十三観音が古くから信仰を集め、「やまがた出羽百観音」として巡礼されている。庄内、置賜、最上とそれぞれの周期で行われている「御開帳」の際は普段目にする事ができない秘仏が公開される。巡礼の衣装や用具は数珠・輪袈裟・白衣・菅笠・金剛杖などが基本とされるが必携ではなく、心を尽くすことが大切だとされている。

置賜三十三観音札所会事務局
第21番札所 小野川観音 宝珠寺
〒999-0076 山形県米沢市小野川町2580
TEL：0238-32-2929
FAX：0238-32-2988
<https://okitama33.net/>

新しい視点 世界を見せる まれびとを呼ぶ



吉川 明紀氏
よしかわ あき

(一社)やまがたアルカディア観光局
戦略会議委員

アートを通して多様性ある世界をひらく
人が輝き、つながり、化学反応が起こる場所

白鷹町文化交流センターの学芸員で、さまざまなイベントや展示の企画運営をしている吉川明紀さん。白鷹町に残る伝統文化、白鷹町の天蚕や深山和紙の生産に積極的に関わりながら、アートの領域で、新たな視点と体験を提供しています。

— やまがたアルカディア観光局(以下、アルカディア観光局)との関わりは？

私は戦略会議委員として月に1度の会議に出席し、アルカディア地域の美しい景観の中でサウナを楽しむ「サウナ部」等の活動にも関わっています。2020年3月には、私が働く白鷹町文化交流センターで「やまがたアルカディア展」新たな自分に出逢える郷山」という企画を行いました。アルカディア観光局での関わりも普段の仕事も、私にとっておもしろく貴重な経験なので、それを他の人にも伝えたいという気持ちで動いています。

— これまでの企画や展示で印象的だったものは何ですか？

— 伝統文化やアートは、地域の人にとっても観光客にとっても魅力的なコンテンツですね。
内容の素敵さ以上に、普段活動している「アートキッズ団」の先生たちの主体的な協力や、外から来たアーティストたちが自ら「白鷹町らしさ」を発掘し、企画に与えてくれたことがありがたく、素晴らしく感じました。彼らは私にとっては来訪神ですよ。恵まれた関係性に感謝しつつ、私はこれからも「まれびと」を呼ぶ人でありたいです。

当館の企画は来場者から「なぜ、これを白鷹町でやっているの？」と聞かれるものが多いです。アーティストやさまざまな分野の先生、コーディネーターの方々との関係性を構築し、普段の白鷹町では見られないもの、できない体験を展開できていると思っています。地域性に縛られず、人に見せるに値するいいものを提供する。年齢、性別、国籍も関係なく「参加してよかった、楽しかった」と、そこにいた人が幸せになれる場を作りたい、という願いが根本にあります。

— そういった意味で、いろいろなものが集結し、ことが起こったと思うのは、長井青年会議所の委員長だったときに主催した「わたしたちのまちの音、まちの色」。音楽とアートを組み合わせて新しいものを生み出したいという思いがあり、繋がりのあるアーティストに声をかけたところ、置賜に伝わる民話から曲を作ってくれました。まず音楽家たちが演奏し、子どもたちが色や形をイメージして大きな布に自由に描き、民話の登場人物を獅子頭に表現してホールから芝生の広場へ獅子舞

MISSION

東洋のアルカディアを子どもたちへ
私たちは、この地に住む人、働く人、訪れる人とともに、精神的にも経済的にも幸福度の高い地域をつくりあげ、次世代につないでいく。

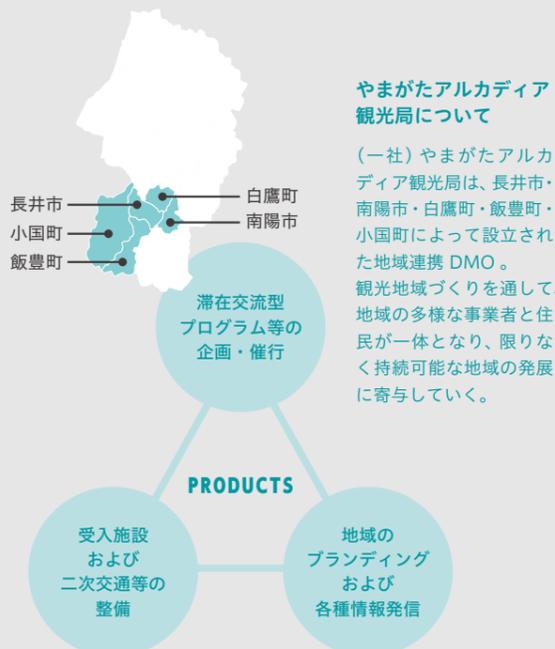
VISION

日本最強のローカル

豊かな風土、持続可能なコミュニティ、いつでも帰れる、みんなを迎えられる心のふるさとやまがた
緑や花に囲まれた、美しい里山風景。人々が行き交い、まちは住まう人の笑顔に包まれ、活気に満ち溢れている。住む人、働く人、訪れる人は、「東洋のアルカディア」と呼ばれるこの地に想いを馳せる。この地に暮らすことを誇り、100年、はるか先まで続く「日本最強のローカル」を目指す。

BRAND CONCEPT

やまがたアルカディア～新たな自分に出逢える郷山～



PROFILE

吉川 明紀(よしかわ・あき) 山形県長井市出身。白鷹町文化交流センター学芸員。白鷹町観光協会理事。深山和紙の製造工程や、白鷹町天蚕の会では飼育に関わる細かな作業にも参加するなど、本質的な関わりと人間本来の心の在りようを大切にしている。

ライク・ア・パードokitamaフォーラム2022を開催しました！

「旅のその先へ。イザベラ・パードのように、軽やかな1羽の鳥のように、」

1年間、アルカディアエリアの四季の移ろいを通して、「現代のイザベラパード」と呼びたくなるような女性が旅をして、この地でいきいきと暮らす女性に出会い、インタビューした様子を動画化した映像の旅「ライク・ア・パードokitama」。

2022年10月1日に、タスパークホテルを会場とし、旅をした皆さんと、迎え入れた地域の皆さんが一堂に会し、それぞれの旅の思い出や撮影の様子、そしてその後の近況報告などを語り合うフォーラムが開催されました。

翌日10月2日は、アルカディアエリアをぐるっと一周するアフターツアーを開催し、秋のアルカディアを堪能していただきました。

自分らしい価値観に出会う映像の旅。

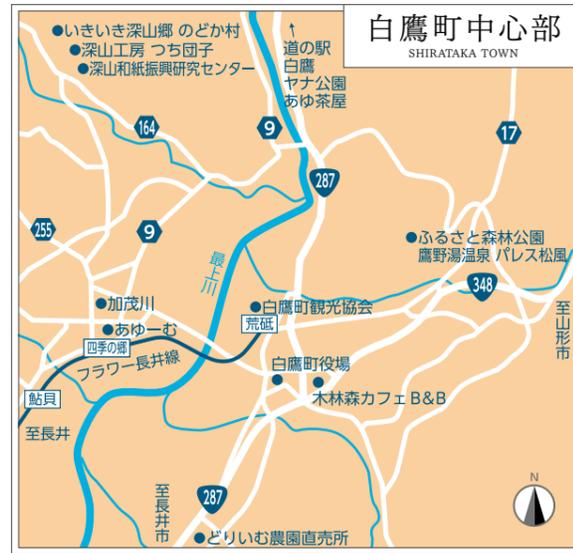
ライク・ア・パードokitama全5編を是非ご覧ください。



映像はコチラから
<https://arcadia-kankei.jp/>



市街地エリア MAP



arcadia
photo
map

arcadia 季刊誌アルカディア

#13 2022年10月発行(年4回発行)

発行/一般社団法人やまがたアルカディア観光局
編集/株式会社やまがたアルカディア編集社
写真/船山裕紀、佐藤俊介
文章/福井 健、上林晃子
デザイン/坂井理枝子

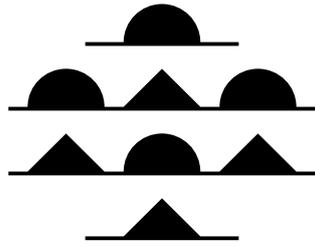


next #14
WINTER issue

特集1_近代とアルカディア
特集2_山岳信仰

- | | |
|--|---|
| <p>1  表紙：長井市草岡 岩ヶ沢道
撮影 date：2019年12月1日 午前7時30分頃</p> <p>2  P03下：長井市五十川 五十川観音
撮影 date：2022年9月13日 午前11時30分頃</p> <p>3  P06右上：白鷹町鮎貝 鮎貝八幡宮
撮影 date：2022年9月14日 午後15時50分頃</p> <p>4  P07右下：長井市草岡 津嶋神社
撮影 date：2013年8月16日 撮影時間不明</p> | <p>5  P8-9：長井市/飯豊町 熊野神社前展望所
撮影 date：2019年9月29日 午前5時30分頃</p> <p>6  P14：小国町大宮 大宮子易両神社
撮影 date：2022年6月25日 午後13時30分頃</p> <p>7  P16：白鷹町鮎貝 白鷹町文化交流センター あゆむ
撮影 date：2022年10月11日 午後16時20分頃</p> <p>8  裏表紙：南陽市赤湯 烏帽子山公園 康寿橋
撮影 date：2020年11月4日 午後13時30分</p> |
|--|---|

本誌に掲載されている写真の場所に行ってみませんか？
そしてすこしの間だけスマホをしまっておいて、美しい風景を眺めてみてください。



やまがた
アルカディア
観光局
YAMAGATA
ARCADIA
Tourism Bureau

